

ほんの少しでいいからこの世界を良くしろ

桜井鈴茂 — 小説家

『きみを夢みて』 スティーヴ・エリクソン



選びあぐねている俺の頭の中に十代の男子が忽然と出現する。わりとイケメン。背丈は俺よりわずかに高く、相手を見下しているような、それでいて何かを乞うているような目つき。高校二年くらいか。こいつ誰？と思うが早いか、男子は「父さん」と呼びかけてきた。慌てて周囲を見渡す。誰もいない。狼狽する俺に気付いていないのか男子は続ける、「本を紹介してよ」。俺は「ん？」と返すのが精一杯だ。「国語の先生に薦められたのを立て続けに読んでるんだけど、どれもイマイチで」「……どんな本読んでるんだ？」そう尋ねながら徐々に状況が掴めてくる。どうやら俺とこいつ……息子は月に一度会う取り決めになっているらしい。つまり、息子の母親とは離婚したってこと。息子は書名を三冊あげる。近代日本文学の名作と戦後文学の名作と比較的最近の芥川賞作品。まあ、妥当。あるいは、無難。「一冊、とっておきのを教えてよ」「一冊？」「うん、一冊。それがつまんなかったら、オレ、本なんか読むのやめる」「おいおい、極端なこと言うなよ」「そもそもさ、本を読み続けると何か良いことあるの？」息子にそう問われて俺は返答に窮する。2019年の今、高校生からのそんな問いにズバリと答えられる人はいるのだろうか？ここでいう「本」は、むろん文学のことだ。

ともあれ、息子と別れて部屋に戻り俺は考えた……まあ、息子が登場する前から考えていたのだが、今やそこに切実さが加わった。その一冊が息子の未来を左右するかもしれない。少なくとも俺を見る目つきは変わるだろう。数年前の引越し以来カオスと化している本棚を漁った。いや、本当は難しく考える必要なんかない。自分が高校生の時に夢中になった本を薦めればいい。それができれば俺だって幸せだ。しかし悲しいことに、今の俺はその本が好きじゃない。何年前かに読み直してみたが、鼻白んでしまった。ならば……サリンジャーのライ麦畑？ ちょっとありがたげな気がする。くそつたれブコスキーは高校生にはさすがに早すぎるだろう。カポーティのティファニー？ ミラーの北回帰線？ ウエルベックのある島の可能性？ 村上龍のテニスボーイの憂鬱？ グレート・ギャツビー？ ボラーニョ？

丸三日かかってようやくスティーヴ・エリクソンの『きみを夢みて』を選び出し、ウェブ書店で購入して息子に届くよう手配した。翌々日の夜に息子からラインが届いた。「ありがとう」のスタンプの後に「なんかメッセージはないの？」とある。「いいから読んでみろって」「ヒントくらい教えてよ。どうしてこの本？」「要するに、近眼になってほしくないんだよな」「オレ、すでに近眼だけど？」「頭の話……ここにいながらもここではない場所へ思いを馳せられる人間になってほしいんだ」「ふーん」「そして、ほんの少しでいいからこの世界を良くしろ」「はあ？ オレが？」「そう、お前が」「どうやって？」「そんなことは俺にもわからん」「この本にはそういうことが書いてあるの？」「どの素晴らしい本にも少しは書いてあるはずだけど、特にその本には書いてある」「わかった。来月会った時に感想伝えるね」

「オーケー、じゃあな」と返すと息子は俺の頭の中でフェイドアウトしていき、やがて姿を消した。●